
おおうつけもの（戦国BASARA）

南条武都

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

おおうつけもの（戦国BASARA）

【Nコード】

N7093H

【作者名】

南条武都

【あらすじ】

「子供の頃とは違うのよ、元親」戦国BASARA・長曾我部元親とオリキャラのラブコメです。（自サイト掲載）

「元親……あなた、いつまでそうしてるつもり？」

亥の刻も過ぎた頃。それまで幾重にも重ねてきた我慢がとうとう尽きて、私は苛立たしく声を荒げた。対する元親といえば、

「ああん？ 何怒ってんだ、紫乃^{しの}。せつかくの美人が台無しだぜ」

大きな杯を一気に干し、上機嫌で戯れ言を口にする。悪びれないその様子に呆れてしまった。

宴の帰りに寄った、と久しぶりに顔を見せたものだから、つい部屋に上げてしまったけれど、忘れていた。お酒が入ると元親は長つ尻になるのだ。

「こんな遅くまで居座るなど言ってるのよ。あなたが帰らないと私いつまでも眠れないわ」

「おいおい何だよ、つめてえなあ。親父さんが死んで寂しくしてんだろうと思つて来てやってんのによ」

辛辣な言葉にわざとらしく傷ついた顔をする元親。それは有り難いけど、と私はため息をつく。

私の家系は代々長曾我家に仕えており、母上が兄上を産んだ時、ちょうど時期が合ったものだから、元親の乳母をつとめた。だから兄上と私、元親は幼い頃から一緒にいた幼なじみ、という事になる。下級武士の娘である私が一国の長にこんな気安い口をきけるのも、先の戦で亡くなった父上を元親が悼んでくれるのも、その縁あつての事だ。大雑把に見えて、細やかに情をかけてくれる元親の心遣いは、確かに有り難い。

けど、だからといって、こんな遅くまで、娘の部屋にいていいわけがないでしょう。

「私のところに来るのなら昼間にして頂戴。子供の頃とは違ふのよ、元親」

「へえ。何が違ふんだ」

とうとう徳利の最後の一滴まで飲み干した元親は、だらしく足を組んでへらへら聞いてくる。

「何がって……」

聞かずとも分かりそうなものを、こいつは。

私も元親はもちろん、とうに元服、裳着をすませている。元親は一日も早く妻を娶り跡継ぎを、と周囲からせつつかれてるし、私も父上が亡くなった事で、親戚筋から縁談を山のように持ち込まれている。

「そんな事分かってるはずよ、元親」

お互い軽々しい事はすべきではない、そう続けようとしたら、不意に元親がぬつと腕を伸ばしてきた。避ける間もなく手を掴まれ、何を思う間もなく引き寄せられる。

「きゃっ！」

どさ、と勢いよく元親の胸にぶつかって悲鳴が出た。鼻がつぶれて痛い。何するのと文句を言うために顔をあげたら、存外元親の顔が近くて、ぎくりとした。

お酒を飲んでいるせいか、濡れたように光る目が私を見下ろし、酒気を帯びた熱い息を漏らす唇がにい、と笑みを形作る。背中に回された腕がぐいと私の肩を掴んで押さえつけ、着物越しでもはつきり熱が伝わるほど、体が密着する。

「なら、紫乃よ」

硬直する私を楽しむように、元親は低く、少し掠れた声を耳に吹き込んだ。両腕で私の体を抱き込んで、囁く。

「ガキの時分にや出来なかった事でもするか」

「……っ！」

ぞくり、と背中を得体の知れないものが駆け抜けて、私は一瞬気が遠くなりかけた。

男にこんな風に抱きしめられた事なんて初めてで、しかも相手が良く見知ったはずの元親だから余計に混乱し、けれど元親が私の顎を掴んで持ち上げ、かすめるように唇を寄せてきた時、

「――！！」

その熱で我に返った私は、ばたばた手足を振った。

「おっと」

唐突な動きに驚いたのか、元親の力が弱まる。その隙に伸ばした手に何かが触れたので、私はそれを掴んで、

「この、うつけもの！！」

ガイン！！

手加減なし、満身の力を込めて、怒鳴りつけながら元親の頭を殴りつけてやったのだった。

空が青く、高い。

その色を映し出す瀬戸内の海は、波穏やか。

眠気を誘うほど涼やかな波音はしかし、威勢良く響く男たちの胸間声や、固い金属音にかき消される。

「……はゝああ」

普段はそれらを、誇りと愛情をもって聞き入る元親だったが、しかし気の抜けたため息をついた。

外国の技術者を捕まえて図面から書き起こし、国がかたぶくほどの予算を割いた巨大兵器がいよいよ完成するというのに、浮いた気持ちになれないのはなぜか。そのわけを考えるだけで気が滅入ってくる。

腑抜けた自分に舌打ちして砂場で横になり、忙しく立ち働く部下たちを肴に杯を進めていると、

「おや、元親様。ご気分が優れないのです？」

建設の指示を出していた男、義峰が手ぬぐいで汗を拭きながら元親のところへやってきた。普段ならおおこいよ義峰、と機嫌良く手招きしたろうが、今日は決まりが悪い。

「何でもねえよ、気にすんな」

歯切れの悪い口調でそう返したが、義峰はどかり、と腰を下ろし、顔の半分を占めるほど大きく口を開けて笑った。

「聞きましたぞ。我が妹が元親様になにやら無礼を働いたとか」

今一番聞きたくない話だ。頬杖について元親はそっぽを向いた。

「……………紫乃が悪かねえさ」

「いやいや、仮にも主を箱枕で殴るなど言語道断。本来ならお手打ちになされて当然のところ、不問に処していただくとは……。この義峰、元親様の寛大なご沙汰に感激しております」

真顔で尤もらしい事を言うが、義峰の唇の端が今にも笑い出しそ

うな形にゆがんでいる。元親は口をへの字に曲げて起きあがった。

「からかうな、馬鹿野郎が」

「ははは、元親様はまだ、紫乃に敵いませぬか」

「そんなんじゃねえよ。いつの話をしてやがる」

色白で書を好む大人しい性格であつたが故、幼少の時分、元親は家臣達より姫若子などと不名誉なあだ名をされ侮られていた。家臣の子らにつつかれてすぐ泣いてしまふほど弱々しかった元親をかばい、守ってくれたのは乳兄弟の義峰とその妹、紫乃だ。

義峰は子供の頃から体格が良く、そこに有るだけで威圧感を与えるに十分な用心棒役。

紫乃はか弱い少女ながら、大層口が回り、見かけこそ屈強だが性根穏やかな兄や元親が口汚く罵られる時にしゃり出、小賢しく言い返して相手を負かしたものだつた。

この二人、その父の忠義^{ただよし}、母の浮笹は、元親が生まれた時から共にあり、歴然とした身分差こそあれ、ほとんど家族のように親しくしていた。

特に性根の似た紫乃と元親は実のきょうだいのように仲が良く、紫乃が裳着を済ませて大人の仲間入りをするまでは、手を取り合つて屋敷を抜け出し、街を遊び歩いたほどである。

「あれも近頃はずいぶん淑やかになったと思つていたのですが、まだまだじゃじゃ馬で敵いませぬな」

実の兄も、口では愚痴めいたことをいつているが、妹がかわいらしゅうて仕方がない、といったげに頬が緩んでいる。その表情にますます罪悪感を覚え、元親はあぐらを組んだ足の間にがくり、と頭を落とした。

「紫乃の枕投げなんざ可愛いもんさ。俺がしようとした事を思えばな」

「と、申しますと？」

「あー、だから、その」

いざ口にしようとする、と、恥ずかしい。顔が熱くなってきたのを

感じながら、元親はもごもご呟いた。

「俺はあいつを、何だ、……抱こうとして、だな」

「……な。何ですと!?!」

普段鷹揚に構えている義峰もさすがに仰天したらしい。がしつと元親の肩をつかみ、主君を殺気だった目で睨み付けてくる。

「それはまことにござりますか。し、紫乃が元親様のお手つきに…

…!」

「ま、待て落ち着け、何もしてねえ、その前にあいつにぶん殴られた!」

ぎりり、と肩の手に痛いほど力がこもったので、慌てて言葉を足すと、義峰はしばし元親をじいつと見つめた後、ほー、と全身の力を抜いて安堵した。

「……なるほど、紫乃の狼藉はそうだったわけでしたか。いや驚きました、まさか元親様が紫乃に、そのような事をなさるとは」

「昨日の宴でしこたま酒かつくらってから、あいつの元へ行つたかな。酔ってたんだよ」

正直今も二日酔いで頭が重い。気分が乗らないのは、そのせいでもある。

「確かに昨夜はずいぶん聞こし召しておられましたな。だから途中でお止め下さい、と申し上げたものを」

説教めいた口調で戒め、ああしかし驚きました、と義峰は息を吐き出した。妹大事とは言え、妙に大げさなその様子に、元親は眉根を寄せる。それに気づいた義峰は言葉を足した。

「いえ、紫乃も縁談を控える身。ここで元親様お手つきとなれば、他の者に嫁がせるわけにはいきませぬゆえ」

「! 紫乃に縁談があるのか」

「ええ。父上が亡くなり、兄妹、いつまでも独り身ではおれませぬ。私は無骨故、嫁の来手などなかなかありませんが、紫乃は兄の目から見てもなかなかの器量よし。十分な持参金も用意できます故、引く手あまたでございますよ」

「……………」

それを聞いて、元親は頭を抱えた。

確かに、紫乃は無骨な父よりも母に似て、梨の花のように可憐な姫になった。元親は未だ妻を持つていないが、遊びを知り数多く女を見てきて尚、紫乃の美しさには敵うまいと思う。身内のひいき目があるにしてもだ。そしてその紫乃の美貌を伝え聞いた男達が、目の色を変えるのも無理はなからう。

しかし。しかし、他の男が紫乃の、あの細い体を抱きしめて愛撫するなど、考えただけで。

「義峰」

「は」

「酒の勢いを借りなきゃ出来ねえ事って、あるよな」

「は。……………は？」

相づちを打った後、元親の言葉に不穏を覚えたらしい。義峰が訝しげに元親を見、そしてハッと息を飲んだ。まさか、と再度元親の肩に手を置き、

「まさか、元親様。酔いに任せずとも、紫乃を抱きたいと願われておいでなのですか」

「……………」

きっぱり、はっきり、明らかな言葉で己の欲をつかれ、元親は顔に血が音を立てて上ってくるのを聞いた。思わず、わざとらしいほど顔を背けてしまう。

「元親様、お答え下され」

力を込めて振り向かせようとしても、頑として答え（いらえ）を拒む元親に根負けした義峰は、ははあ、と気抜けした声を漏らす。しばし沈黙が二人の合間に落ち、それを補うように金槌で釘を打つ高い音と波が絶え間なく鳴り響いていく。

「……………なるほど」

その居たたまれぬ沈黙を先に破ったのは義峰の方だった。元親が顔を横にそらしたまま、目だけ向けると、義峰は改まった様子で正

座をした。

「そのようなご意向なのでしたら、話は早い。元親様、我が妹・紫乃をお側に召し抱えていただだけませぬか」

「……何だと？」

今度は元親が呆氣にとられる側だった。言葉を理解した後、今度は耳まで真っ赤になって慌てる。

「ま、待ちやがれ義峰！ 俺あ、別にそんなつもりで言ったわけじゃないくてだな！」

「では、どのようなおつもりだったと言うのです。酔いの戯れで一度きり、と？」

「違い！」

確かに酒の助けで、ああまで強引に紫乃を抱き寄せはしたが、戯れのつもりは無かった。義峰に向き直り、元親は片方だけの目でしたかと見据えた。

「義峰。俺とお前と紫乃は、ずっと一緒に居た」

「ええ」

「俺にとつちや義峰は本当の兄貴みてえで、いつかお前みたいにでけえ男になるんだ、とガキの頃から決めてた」

「それはそれは」

「紫乃だって本当の妹みたいに可愛がつてきてやったつもりだ」

「あれは元親様を弟と思っっているようですが」

「んな事あどうでもいい。とにかく、俺はおまえらと本当の家族みてえに思っつて、大事に大事にしてきたんだ」

「光栄にござりますな」

「……なのに」

なのに、ともう一度繰り返し、元親は砂浜の上で拳を握りしめた。爪と砂が手のひらに食い込み、ちくちくしたが、それくらいでは痛みが足りない。奥歯を噛み、ぎりぎり腕に力を込めて、元親は低く、低く唸った。

「俺あお前も紫乃も傷つけたくねえ。なのに何でだ」

「……………元親様？」

異様な雰囲気、義峰の声音が慎重になった。腫れ物に触れるようなその口調に、理不尽と思いながら苛立ちが募る。元親は拳を手応えのない砂浜に打ち付ける。

「紫乃が欲しい。欲しくて欲しくてたまらねえ。滅茶苦茶に抱いて、紫乃が俺の名だけ呼んでりゃいいと思う」

あの瞳に自分だけを映し、自分だけのために啼く紫乃が欲しい。

「……海賊は奪うのが流儀、そう言ったって、駄目だろ、これじゃ幾度となく描いてきた心の中の紫乃を打ち消した元親は、ふ、と脱力して苦笑した。

「俺は、紫乃を傷つけたくねえ。てめえの好きに抱いてはき出してそれで俺は満足だろうが、あいつはどうなんだ。

……俺はあいつに、幸せになってもらいてえ。あいつがいつでも笑って、楽しくしてくれてりゃそれで良いんだ。俺みてえに自分勝手な野郎は、あいつを傷つけて泣かせるしかねえ。そんな奴に、紫乃を幸せになんて出来ねえ。

なあ、そつだろ、義峰」

「……………」

義峰は半眼になって元親をにらみ据え、そしてため息をついた。

「姫若子の名はまだ、返上されるべきでなかったやも知れませぬな」

「あ？」

「元親様。あなたは今、紫乃の事を思って悩んでおられるのではない。あなたは今、己の中の獣に怯えておられるのだ」

「な……………」

「紫乃の縁組み、しばし止めておきましょう。元親様は今一度、ご自身の心を見直されると良い」

義峰はすつくと立ち上がり、手ぬぐいを額に巻いた。口の端が上がる。

「私自身で言えば、元親様が不肖の妹を貰って下されば、非常に喜ばしく思いますぞ？」

「……義峰」

太陽に似た開けっぴろげな笑顔を残して、義峰は作業場へと戻っていく。赤銅色に焼けたその背中を見つめ、元親はぼりぼり、と頭を掻いた。冴えない気分はより、酷くなっているような気がしてならなかった。

しとすと、御簾越しに雨の音が聞こえる。

「……はあ……」

板敷きの上に横たわり、その音に耳をすませながら、私は何度目かのため息をもらした。

気が滅入っているのは、雨のせいじゃない。

ここ数日頭から離れない、元親のせいだ。

『あの夜』から日が経ったけれど、元親は全然顔を見せない。家督を継いでからずいぶん忙しくなって、気軽に遊びに来られなくなったのは分かってはいるけど、それにしただって。

（乙女に狼藉を働こうとしたのだもの。一言、謝りの文でも寄越すのが筋じゃない？）

今はいい加減で大雑把に見える元親だけど、もともとは人一倍気を遣う質だ。悪いと思ってるなら、酔いが醒めた時点でやってきて土下座でもしそうなもののに。

（もしかして、あれを悪いと思ってるのかしら）

ごろつと寝返りをして、お行儀が悪いけれど、親指の爪を軽く噛んで考える。

元親が元服してからというもの、時折女の気配を感じる事はあった。衣から、自分では絶対つけない香の匂いがしたり、兄上とどこかの女が評判だ、なんて噂話をしてたりもした。

元親だって、いつまでも私が知ってる姫若子じゃない、もう大人の男だ。だから女の扱いくらいとくに心得ているはず。あの夜の事だっただだ戯れてみせただけ、わざわざ謝るほどの事でも無いと思っっているのかも知れない。

……そう思ったら、何だかイライラしてきた。私は反対側に寝返りを打って、爪を噛むのをやめた。その指が唇に触れて、不意にかあつと頭に血が上った。『あの夜』の事を、急にまざまざと思い出

してしまったからだ。

「……初めてだったのに」

接吻は勿論、あんな風に抱きしめられるのさえ、初めてだったのに。

絵巻物では、互いに恋い慕う二人が情熱的な文をかわし、その思いを胸に一夜の逢瀬を……というのが普通だ。

それが現実そのまま、というのはさすがに夢を見すぎだと思うけれど、よりによって酔った勢いでなんて、最低過ぎる。それも相手があの元親だなんて。

しかもそれを気にしてるのが私だけなのだとしたら、自分にも元親にも腹が立つてきた。

（元親の、ばか。間抜け。変態）

心の中で毒づいたら、苛々がどんどん募ってくる。何で元親の事で、こんなに嫌な気分にならなきゃいけないんだろう。

決めた、元親がこれからどれだけ謝ってきたって、もう絶対許してやらない。乙女の純情を汚した罪は打ち首獄門に値するくらい、重いよ。

なんて事を、床板に拳を打ち付けて決意していたら、

ドスドスドス！ ガラッ！

「紫乃、いるか！」

「きゃあっ！？」

地震のような勢いで廊下を渡ってきた兄上が、いきなり戸を開けたので、飛び上がってしまった。

「紫乃、また床に寝転がっていたのか、はしたない」

「そ、そんな事言うなら兄上だって、ちゃんと取り次ぎしてから来て頂戴！」

「細かい事は気にするな」

「気にするわよ！ 礼儀はきちんとわきまえて、といつも言ってるでしょ！？」

普通、兄妹であっても女人の部屋を訪れるのであれば、先触れく

らいするものだ。噛みつくように叫ぶと、兄上は気圧されたように上体をひいて、口を曲げた。

「随分機嫌が悪いな、紫乃。何かあったか」

「……何もないわよ」

兄上なら元親から聞いて知ってるかもしれないけど、わざわざ説明したくない。そっぽを向くと、兄上は腰を下ろして笑った。

「まあそう拗ねるな。お前の機嫌も直る良い話を持ってきてやったぞ」

「良い話？」

脇息に頬杖をつき、我ながら不機嫌な声で答えると、兄上はぽんと膝を叩いて前に身を乗り出した。

「かねてより話のあったお前の縁談。ようよう、お相手が決まったぞ」

「……………え」

簡潔な言葉に、頭がついていかなかった。

理解できずにぼかん、と口を開ける私に、聞こえなかったのか、と兄上が繰り返す。

「だからな、今日、お前の輿入れ先が決まったと言ったんだ」

輿入れ、先？

言の葉がしみこみ、体が強ばる。舌が凍り付き、ざあっと音を立てて血が下がる音がした。

一瞬目の前がぐらりと歪み、脇息にしがみつく。

「っ……………」

「おう、何だ。言葉に出来ぬほど驚いたか、紫乃？」

兄上は私とは正反対に上機嫌のまま、話を続ける。

「こういった話は良縁に恵まれ、とんとんと決まるものだな。事は父上の喪が明けてからだが」

「あ、兄上」

「矢曾木家が娘の祝言だからな、派手に行わねば。何しろ、こたびのお相手は」

「兄上！」

つらつらと話を進める兄上を、私は大声で遮った。驚いて目を丸くする兄上に言いつのる。

「兄上、どうして私に黙って決めたの!？」

「ん？ 何を言う紫乃、縁組に関してはわしに一任すると言ったではないか」

「そうだけど、でも、でも、こんな急すぎるわ！ 決める前に私に一言、言ってくれたって良いじゃない！」

「いや、しかし」

気色ばんで言いつのる私に、兄上は困惑した様子で首を傾げた。それはそうだろう、兄上が言ったように、自分の縁談は全て任せる、と言ったのは私なのだから、こんな風に責めるのは間違ってる。

「相手が誰でも構わぬ、随意にという事だったと思うが……何だ、紫乃。縁談が今更いやになったか」

けれど、その刹那。稲光のように元親の顔が頭の中に浮かんで消え、途端、カッと体が燃えた。

「馬鹿！」

「へ？」

面罵されて兄上はきょとん、と目を瞬く。その間の抜けた顔が更に苛立ちを煽って、腹立たしい。

「私の気持ちも考えないで、いつだって自分だけで物事を進めて……」

「兄上も元親も勝手よ！」

「元親様？ おい紫乃、お前何を言って」

「出てって！ 出てってよ！」

「うわ！」

手に触れた脇息を力任せに投げつけると、兄上はそれを避け、慌てて部屋の外へ逃げ出した。ぱしん、と閉められた戸を、肩で息をしながら睨み付けた私は、目眩をこらえて唇を噛む。

（皆、私の事なんてどうでも良いと思ってるんだわ！）

それが子供じみた癪癪に過ぎない事は分かっていた。それでも我

慢出来なくて、私はその場につっぱした。

（兄上も、元親も、大嫌い！）

目が潤み、熱くなる。縁談という言葉と、思い浮かんだ元親の笑顔が、胸に重くのしかかってくるようだった。

……って……待つてよ、しの！」

視界一杯に広がる緑をかき分けると、生い茂る木々の合間から太陽の光が差し込む。陽光に目を細め、息を切らしながら名を呼ぶと、前に行く少女が肩ほどの髪を翻して振り返った。

「遅いよ、弥三郎！ 早くしないとひなが巢立つちゃう」

しのは弥三郎をせき立てて更に足を速め、道泣き道をどんどん進んでいってしまう。弥三郎はうう、と唸って後を追う。

しのは自分より小さな女の子なのに、どうしてあかも元気なのだろう。後を追って潜り込んだ茂みは予想より厚く、しなやかな枝に何度か体を叩かれて泣きそうになる。ぐつと唇を噛んでこらえ、やつとの事で抜けると、しのが獣道の真ん中に立ち止まっていた。

「しの」

待つていてくれたのか。追いついてその肩に手を置いた時、

「！」

弥三郎はぎくり、と体を強ばらせた。少女の向こう側、道の先に、犬がいたのだ。

（や、野犬！？）

それは屋敷に居る飼犬とは、まるで違った。あばらが浮くほどやせ細る身体は一回りも二回りも大きい。飢えた目をギラギラ光らせ、食いしばった歯の間からよだれがしたたり落ちる。喉の奥でくるくる鳴きながら、野犬はちらりと弥三郎に視線を送ったが、すぐしのへ視線を戻した。

（う……うう……）

痺れたように身体が凍り付き、動けない。からからに乾いた喉にごくり、と唾を流し込んだ時、弥三郎はハツとした。軽く触れた手の下で、少女の身体が細かく震えている事に気がついたのだ。目を動かして見下ろすと、しのは真っ青になって硬直している。

（しのも……怖い、んだ）

考えずとも当たり前だ。自分よりも大きな野犬が牙をむいてこちらをにらみ据えているのだ。こんな小さなしのが、怖くないはずがない。

（……ま、守らなきゃ）

獣は怖い。今すぐ走って逃げ出したい。けれど今、しのを守れるのは他でもない、自分だけだ。

（守らなきゃ！）

心の中で叫ぶと、肝が据わった。震えが止まる。

「……」

息を殺しながら、弥三郎は野犬を刺激しないようにそつとかがんで、地面に膝をついた。指で辺りを探ると、その先に石が当たる。手のひら大のそれを握りしめ、野犬を睨み付ける。

野犬はまだ、しのに狙いを定めているようだ。

（まず、弱い方を狙うつもりなのか）

あるいは。自分のように背ばかり高くてひよろひよろした子供なんて、相手にもならないと思っているのかもしれない。

「……！！」

そう思ったらカツと腹の底が熱くなって、首に力がこもった。

「……しの、下がって」

低く囁くと、しのがびくつとしてこちらを見た。不安に揺れるその目に、頼もしく映れば良いのに、そう思いながら頷く。しのはぎゅつと唇を横にひき、一步後ろに下がった。その動きに反応して野犬が頭を下げ、前に出る体勢になったところへ、

「……やっ！」

弥三郎は振りかぶり、力任せに石を投げつけた。目の辺りに狙いをつけたはずが、力の入れすぎで手元が狂い、石は犬の鼻先に当たった。

「ギャンツ！！」

だがそれが良かったのか、野犬は悲鳴を上げて跳びすさった。明

らかに怯んだその様子に勇気づけられたのか、

「弥三郎！」

硬直から解放されたしのが声をあげ、その場にあるものを手当たり次第に投げつけ始めた。しのに押されるように、

「や……やあああ！」

意味のない叫び声を上げながら、弥三郎も野犬に向かって石つづてをいくつもぶつける。次々と降るように浴びせられる石や枝に野犬は怖じ気づき、ヒンヒン鳴きだし、やがて尻尾をまいて逃げ出した。

「……はっ、はっ、はっ……」

「はあ、はあ、はあ……」

石や枝を握りしめ構えた弥三郎としのは、野犬の姿が見えなくなつてようやく、その場に崩れ落ちた。息を荒げたまま、顔を見合わせる。しばらく、お互い惚けた状態で見つめ合った後、不意にしのの顔がゆがみ、

「う……わああん！」

喉が裂けるかと思うほど大きな声を上げて泣き始めた。大きな瞳から大きな涙の粒をぼろぼろ落とす様につられて、弥三郎の視界も揺らぐ。

「うつ、う、うわああん！」

「ああーん、ああーん！」

少女と少年は抱き合つて泣き続ける。二人の声が静謐な森の中に響き渡り、近くの木に止まっていた鳥が飛び立った……

「……………」

ふ、と開いた隻眼はぼやけ、しかしすぐに焦点を取り戻す。瞬きをして、薄闇に沈んだ天井を見上げた後、ぐいっと身体を起こした。まだ寝ぼけてるせいか、頭がぼーっとする。

ぼりぼり頭をかいて、俺はふう、とため息をついた。掛布を引っ

pegして立ち上がり、障子を開ける。

まだ夜明け前だ。しん、と静まりかえった朝の空気は張りつめて冷たい。俺は廊下に踏み出し、濡れ縁に腰を下ろして頼杖をついた。
(懐かしい夢を見たもんだぜ)

あれはまだ俺が姫若子なんて呼ばれてた頃だ。紫乃は昔っから気が強くて、俺や義峰を引っ張ってあちこち走り回ってたっけ。

(あん時もそうだったな)

巢立ち間近のひな鳥を見に行こうと、いつものように紫乃へ連れて行かれた山で、野犬に出くわした。勇気をふるって、やっとの事で追い返したはいいものの、二人とも泣いて動けなくなつて。

(後で迎えに来た義峰にさんざんっばら、叱られたっけな)

ふ、と口が緩み、ついで横にひき結ぶ。

(あん時初めて、紫乃を守らなきゃならねえ、そう思った)

それまで自分より強いと思っていた紫乃が、何よりもか弱く思えて。

「こいつを守るために俺が強くななきゃならねえ。そう決めたんだ」

呟いた言葉は誰の耳に届くでもなく、朝の静寂の中に吸い込まれて消える。

「……………」

俺は目を細めて空を見上げる。天は紫から赤に塗り変わり、太陽がその姿を見せ始めていた。

昼まで、普段はやりもしない書類仕事をだらだら片づけた後、ようやく重い腰をあげた元親は、義峰の部屋へ足を向けた。

「義峰、居るか……」

「おや、元親様」

「っと、客か？」

声をかけながら障子を開けたところ、部屋の中に義峰ともう一人尼僧が居たので、たたらを踏む。ゆるりと顔を向けた尼僧を見て、元親はぱつと顔を輝かせた。

「おお、浮笹じゃねえか！」

「若様、お久しゅうございます」

元親の乳母だった浮笹はにこり、と微笑む。痩せはしたが、百合のごとくと称えられた美貌はそのまま、尼僧姿だにより清らかに美しく見える。

「おいおい、若様はよせよ。俺あもうガキじゃねえんだぜ」

「わたくしも浮笹ではございませんよ」

上座に腰を下ろし、そうだったな、と元親は頭をかいた。浮笹は夫の忠義が命を落とした戦の後、出家をしている。出家後の名前は清心せいしんという。

「わかっちゃいるんだが、慣れ親しんだ名つてのはなかなか変えられないもんでな」

「その通りですわね、若様」

「……まあいいや。で、いつこっちに来たんだ」

「昨夜ですよ、元親様。雨中に突然の事で、私も驚きましたが」

義峰が元親に茶を差し出して、にこやかに言う。ほほほ、と口に手を当てて浮笹が声を上げた。

「紫乃のお相手が決まったと文で寄越されたら、己が目で検分しなければと思うでしょう」

「け、検分しに来たのかよ……」

ひき、と元親の口が引きつった。外見こそ淑やかな女性だが、浮笹はあけすけな物言いをする。浮笹に笑顔でこき下ろされ、元親・義峰のみならず、忠義も何度凍り付いたかshれない。その浮笹が検分するといふのであれば、紫乃の未来の夫がどれだけの苦境に立たされるか、考えるだけで寒気がした。

「あー、あーそれはそれとしてだな」

とりあえず目の前の障害から目をそらして、元親は義峰へ顔を向けた。

「義峰。紫乃の事だがよ」

「……はっ」

それまで笑んでいた義峰の顔が緊張に強ばる。そのまま言葉の続きを待ったが、義峰は正座をしたままかしまつて、黙り込んでいるので、

「……もしかして、駄目だったのか」

元親は、我ながら情けない口調でおそろおそろ尋ねた。いやそのと目を泳がせる義峰に、浮笹が穏やかに言葉をかける。

「義峰。お答えなさい」

「母上……しかし……」

「こういう事はきちんと伝えねば、過ちを招きますよ。二人の事を思ふのであれば尚のこと、正直にお答えなさい」

「……はっ。分かりました、母上」

母に頭を下げ、義峰は改めて主に向かい合った。固唾を飲む元親を真っ直ぐ見つめ、沈痛な面持ちで口を開いた。

「元親様よりお申し出頂きましたお召し抱えの件、紫乃が……その、難色を示しまして」

「………そうかよ」

義峰の様子から予想していたが、言葉にされると胸に重い。元親は口の端を曲げて目線を下げ、ため息をついた。

「なら、しょうがねえやな。この話は無かった事に」

「お待ちなさいませ、若様」

胸の痛みを無視するため、早々に話を切り上げようとする元親を、浮笹が手を挙げて止めた。

「一度断られたくらいで諦めるなど、あなたらしくもない。それとも紫乃を求められたのは、さほど軽いお気持ちだったのですか」

「それは……違えよ」

以前、義峰に言っただのと同じ答えを返す。

「けどよ、紫乃が否と言ってるものを、無理強いする訳にもいかなえだろ」

「これは殊勝な事。とても海賊の台詞とは思えませぬな」

浮笹が軽やかな笑い声を立てたので、元親は仏頂面になった。

「笑い事じゃねえだろ、浮笹。事はお前の娘の話だぜ」

「なればこそ、紫乃にとって善き伴侶を選んであげたい、と願うのが親心でございます。義峰から若様が紫乃をご所望されていると聞いた時はこの浮笹、心躍る思いでしたのに……」

「なんだそりゃ」

義峰が入れた茶で口を湿らす元親。幼い頃から馴染んでいる浮笹と女の、しかも紫乃の嫁取り話をするなんて、緊張してならない。浮笹は目を細めて口元を緩めた。

「昔から紫乃と若様はとも仲よろしゅうしておりましたからね。いずれ娶せれば、良き夫婦めおとになろうと思っておりましたのよ」

「母上、言葉が過ぎますぞ」

控えていた義峰が慌てて言葉を挟んだ。

矢曾木家は長曾我部家に長年仕えているが、元々身分低い武門。力をつけるためには戦場で名をあげる、または有力な家筋と血筋を結ぶのが習いである。

その矢曾木家からすれば、主君たる長曾我部元親との縁組はまたとない良縁だが、それ故に妬み邪推する者も少なくない。矢曾木の現当主である義峰にしてみれば、幼年の頃からの野心を匂わせる母の発言に慌てるのは当然の事だった。

しかし母は朗らかに笑った。

「もはや俗世と縁切れた婆の言う事など、本気に取るものがあるますか」

「お前だって、紫乃を貰ってくれりや嬉しい、なんて言つてたじゃねえか」

二人の言葉に義峰は苦笑して、居住まいを正した。

「それはそうですが、肝心の紫乃が嫌がつているのであれば、このまま話を進めるわけにもいきませんまい」

「……………」

紫乃が嫌がつている、という言葉が不意打ちで効き、元親は思わず脇息にもたれかかった。

浮笹の言うとおり、紫乃とは昔から仲良くやってきた。双方に男女の情があるかと言われれば言葉に窮するが、少なくとも嫌われてはいないだろうとは思っていたのだが、

（やつぱり、あれか。こないだの無理強いで見限られたか）

雰囲気も何もなく、そこいらの遊女のように扱われれば、紫乃が激怒しても無理はあるまい。

だが、だからこそ、今度こそ本気の心を伝えようと、求婚したというのに。

「まあ若様、そう落ち込まれずに」

脇息を抱えてへこむ元親を見かねて、浮笹が柔らかく声をかけた。「若様が望んでおられる事、紫乃へ直にお伝えなられましたか？」

「……………あん？」

顔を上げて、考えてみる。紫乃の輿入れについては、いつさいを取り仕切る義峰に申し入れたし、あの夜からは顔を合わせるのにも気まずく、紫乃の部屋を訪れる事もしていない。

「……………そっぴや、紫乃には全然、話してねえな」

「こたびのように殿方だけで話を進めては、どんな女でも機嫌を損ねますよ」

「しかし母上。紫乃は私に全て任せると言つたのですぞ」

「義峰、あなたも一度妻を持った身なら、少しは女心というものを
お考えなさい」

ぴしゃりと息子を打ち据えて、浮笹は長いまつげを伏せて憂いの
表情を浮かべる。

「……これがただの政略結婚であれば、それも致し方のないこと。
けれど、若様が紫乃を好いておられるのであれば、そのお気持ちを
をまずお伝えなさいませ」

「……………」

脇息を手放し、元親はそりやそうだな、と頭をかいた。

顔を合わせれば何を言われるか、とつい避けてしまったが、西海
の鬼ともあるう男が女の言葉にびくびくするなんて、滑稽に過ぎる。
（嫌がられるか。罵られるか。どっちなしらねえが、白黒はてめえ
でつけねえとな）

「分かったぜ、浮笹。紫乃とはきちんと話をつけてくる」

腹をくくってそう宣言すると、

「ええ、若様。わたくしも一度、母として紫乃と話をしてみましょ
う」

浮笹はにっこり微笑み、小首を傾げてみせた。

「そして今度こそ、わたくしに若様の検分をさせて下さいましね」

「……そいつあ、遠慮したいもんだぜ」

久方ぶりにこちらへ戻ってこられた母上が、昼過ぎに私の部屋へおいでになった。修行の日々に勤しんでおられるせいか、お顔の線がずいぶん細くなられたけど、変わらずお元気そうだ。

父上が亡くなられた時は寝込まれて、そのまま儂くなってしまわれるかも知れない、とずいぶん心配したけど、落飾して御仏に心身を預けられたせいか、以前のようにゆったりと落ち着いていらっしやるご様子。

（良かった、母上がお元気になられて）

案じていた分ほつとして、私は母上とよもやま話に花を咲かせた。母上が居なくなってしまうわれてからの事をあれこれ語っていたら、話は自然、私の縁談へと移った。

「義峰から聞きましたよ、紫乃。こたびの縁談を嫌がっているのですって？」

「兄上ったら、もう母上にお話したのね」

「当然でしょう、とても心配していましたよ。全て義峰に任せていたのに、事が決まるとなったら否というなんて、縁談が嫌になったのかしら？」

「そんな事ないわ、母上」

柔らかな声で問われ、私は急いて首を振った。

「昨日は心の準備が出来ないうちに突然言われて、驚いただけよ。」

兄上は私に良いように計らって下さっているのに、ひどいことをしてしまっただわ」

あんな風に、子供っぽく癪癪を起こすつもりなんて無かったのに。兄上にはちゃんと謝らないと。

「では、縁談そのものは良いと思っているのね」

「はい」

迷いなく頷くと、母上はふわり、と美しく顔をほころばせた。

「そう、それは良かったこと」

「もちろん、矢曾木の家のためになるのだから、良い事に決まっているわ」

「……何ですって？」

途端に母上の表情が曇ったのでどきり、とする。私、変なこと言っただかしら。

「紫乃、あなたは家のために嫁ぐつもりなの？ どうしてそんな事を」

問われて、私は居住まいを正した。父上が亡くなられてからずっと考えていた事、母上にもお伝えしたいと思ったからだ。改まって口火を切る。

「……母上。私は最近、他国の話を兄上に教えて頂いているの。」

あの第六天魔王・織田信長ご正室の濃姫や、浅井へ嫁がれたお市様は、戦場へ武器を手に随伴して、お家の為に戦っていらつしやるのですって。

私、それを羨ましく思うの。戦場へはせ参ぜず、家にこもってただひたすら、戦勝祈願をすることしか出来ないのは、歯がゆいわ」
「何を言うの、紫乃。女の身で戦場へ足を踏み入れるなど、あつてはならない事。ましてや己が手で人を殺めるなど……」

「もちろん、私には振るう武器も力も無いから、戦について行くなんて事も出来ない。人の命を奪いたいわけでもないわ。だけど私、兄上や元親の役に立ちたいの」

私は己を鼓舞するように、ぎゅ、と膝の上で拳を握りしめた。

「だから、私に出来る事が何かを考えてみたの。そうしたらどこぞの有力な武将と縁を結んで、矢曾木を強くする事じゃないか、と思っただの」

「まあ……」

母上は嘆息して、袖で口元を覆い隠した。

「紫乃、義峰が家のために、あなたを犠牲にする事はないでしょうに」

「兄上は呑気に構えすぎなのよ」

兄上を悪く言いたくはないけれど、私はつい語気を強めてしまう。
「今の位が分相応、とのんびり構えて、出世の機会も他の人に譲ってしまつて。矢曾木は昔から長曾我部家に仕えているのに、だから何時までもうだつの上がらないままなんだわ」

「言葉が過ぎますよ、紫乃」

母上が困惑顔で窘められたけど、でも本当の事だ。膝の上の拳をぐつと持ち上げて、私はますます強く声を発した。

「近頃では織田や豊臣の勢力がどんどん増して、一国が一夜のうちに滅ぶ、なんて噂も聞こえてくるわ。今のところ四国はまだ大きな戦に巻き込まれていないけれど、いつまでものんびり構えていられないでしょう」

「それはそうだけれど……若様はそのために、南蛮の力強い兵器を作っておられるのでしょうか？」

「そうみたいね。どんなものを作っているのか、見せてくれないけれど、兄上の話では随分強力なものみたい」

織田信長がいち早く戦に取り入れた南蛮の火縄銃。

その存在を知った途端、元親は方々へ情報収集に走り、外国の技術者をどこから連れてきた。そして火縄銃を改良し、大砲を船に積み込んで、あつという間もなく、長曾我部水軍に火器を用いた軍略を取り入れた。最近ではそれより更に強大な力強い兵器まで作っている。

銃を日の本に持ち込んだのは織田だけど、それを素早く取り込んで兵力とした元親の抜け目なさには、ほとほと感心してしまう。

そもそも、長曾我部水軍は近隣の漁村から集められた荒くれ者達で形成されている。兵と言っても訓練された者達ではなく元は漁師もめ事が絶えなくて大変だったそうだけど、彼らが強固な忠誠心をもって付き従うようになったのは、元親の尽力によるものらしい。

新しいものを躊躇う事無く受け入れる柔軟さと、人の絆を大切に
する優しさ。四国を統一してのけたのは元親がそういう人間だから

だと思う。兄上が見返りなどいつさい気にせず、ひたすら元親に忠誠を捧げているのも、その為だろう。

不満に思うところはあるけれど、私は兄上や元親のそういうところはとても尊敬出来るし、誇りに思ってる。だからこそ、私も、何か自分を役立てたい。

「……驚いたわ。まさかあなたがそんな事を考えていたなんて」
一生懸命、自分の考えを説明すると、母上はほう、と息をもらした。

「では、本気なのね。あなたの縁談が矢曾木のため、というのは」
「ええ。矢曾木が強くなれば、国のためにもっと働けるもの」
「それはつまり、若様の御為、という事かしら？」

「それは……そ、そういう事になる、わね」
少し前に元親がいかに優れた国主か、と力説していたにも関わらず、改めて母上の口から元親の名が出てきた途端、いきなり顔が熱くなった。

いやだ、どうして赤くなるの。こんな顔、変に思われてしまう。
私は頬を慌てて手で隠したけれど、母上にはお見通しのよう。

母上はいざって私のそばに来られた。上体を曲げてこちらをのぞき込み、目を細めて微笑まれる。

「紫乃は、若様をお慕いしているの？」
「え！」

予想外の問いに心の臓が跳ね上がる。は、母上ったら、何て事をお聞きになるの！？ 私は紅潮した頬を隠したまま、しばらく声をせせなかつた。そしてやっとの事で絞り出した答え（いらえ）は、
「……わ、分からないわ」
だった。母上が首を傾げる。

「分からない？」
「だ、だって、今まで考えたことないもの。元親は……だって、元親だし」

まるで子供みたいに、言葉が要領を得ない。もう少しまともな事

を言いたいのには、私の心の中はぐちゃぐちゃで、まとめられやしなかった。

だって、元親よ。もう覚えてもないくらい、ずうっと一緒にいた、あの元親。もう一人の兄のような、弟のような、友のような。隣に居て当たり前、空気のような存在。

だけどいつの間にか、背が伸びて力をつけて、大の男でも持ち上げられないような碇槍を軽々と振り回し、四国の長として大勢の民草の上に立つようになった元親。

『ガキの時分にや出来なかった事でもするか』

私をからかって、大人の男の顔で迫ってきたから、息が詰まるかと思うくらい驚いて、粗略な扱いに怒りを覚えて。

だけどいつまでも、腕の力強さを、厚い胸板を、濡れたように輝く瞳を忘れられなくて、戸惑って。

「だって……分らないの。分らないのよ、全然」

ここ数日考え続けていた事が急にどっと押し寄せてきて、目が回りそうになる。蚊の鳴くような情けない声でそう呟いたら、母上は少し間を置いた後、私の手を取った。柔らかくて温かい両手で包み込まれ、花のつぼみが綻ぶような笑顔で仰る。

「紫乃。分らないのであれば、若様と語ろうてごらんなさい」

「元親、と？」

でも、こんなに支離滅裂な気持ちで元親と話なんて。尻込みする私へ、母上は穏やかに続けられる。

「分らない、分らないと怖じ気づいているばかりでは、何も出来ませんよ。あなたが本当に己を役立てたいと思うのであれば、一度、全てを吐き出してしまいなさい」

「母上……」

「何事も、語らう事から始まるのですよ、紫乃。恐れず、前に進みなさい。さすれば、あなたの道は開けるでしょう」

母上の黒々とした瞳を見つめ、私はぐっと唇を噛みしめて俯いた。
(元親に、知ってもらいたい)

そう思う気持ちは、確かにある。

元親を実の家族のように思っている事。元親を一国の主として尊敬している事。その力になりたいという事。

そして、

（縁談の事を、何と言うのか）

元親がもし私の縁談話を知ったら、それはめでたいと祝うのか、断れと言うのか。

それを知りたいと思う気持ちがあるのを、見ないふりする事も、出来なくて。

「……………分かったわ、母上。そうして、みる」

私はようよう、頷いた。怖いと思う気持ちはまだ根を張ってしっかり在るけれど、確かに立ち止まっていれば何も出来ないのだから「紫乃」

母上が私の手をぎゅっと握りしめる。目線を上げると、母上は軽やかな笑い声を漏らして目を細めた。

「案ずる事はありませんよ、紫乃。全ては良き形に収まるものです……………そうだと、良いのだけれど。母上の言葉も今は、心に淀む不安を取り払う事は出来なくて、私は曖昧に微笑む事しか出来なかった。」

浮笹に発破をかけられたおかげで、ようやく紫乃に会う気になった俺は、さっそくあいつの部屋に向かった。どすどす廊下を進み、角を曲がって後少し、のところで浮笹と出くわす。

「っと、浮笹」

「おや、若様。紫乃のところへおいでになるのですか」

「ああ……まあな」

せつつかれてすぐ、いそいそ女のところへ行くとところを見られるなんて、かつこいいもんじゃねえ。頭をかいて齒切れの悪い返事を返すと、浮笹はうふふ、と含み笑いを漏らした。

「何だよ」

「まあまあ若様ときたら、これから求婚しに行く殿方とは思われぬ凶相。若様に気の利いた台詞など期待してはおりませんから、せめて笑顔になられませ」

「……悪かったな、凶相で」

そりゃ俺は目の覚めるような色男顔じゃねえし、女が喜ぶような世辞も言えねえけどよ……。渋面になる俺に、浮笹は小首を傾げて微笑する。

「そう難しい顔をなさる必要はありませんよ、若様」

「あん？」

「紫乃は色々と思うところがあるようですけれど、決して若様を嫌うているわけではございませんもの」

「そ、そうなのか？」

ちよつとばかり自信が無くなっていたので、探るような声音で問うと、浮笹はもう一度唇に笑みをためて、

「女は目と目を合わせて思いを計るもの。若様が心の丈を打ち明けられれば、きつと紫乃も喜ぶでしょう。お気張りあそばせ、若様」
そう言い残して立ち去った。

「……」

一人廊下に残った俺は、ため息をつき、がりがり頭をかいた。母親の浮笹がいうのなら、紫乃は俺を嫌ってないのかもしれない。結婚して良いと思うくらい好いてるかどうかは別だろう。

紫乃が俺に惚れてるなら、義峰が最初に伝えた時点で快諾しそうなもんだ。だが、そもそも俺は紫乃と顔つきあわせて、口説いたわけじゃねえ。兄貴伝いに話を決めようなんてこすい真似したのがいけねえんだ。浮笹の言うように、本人同士で話をすりゃ、案外うまく事が進むかもしれねえな。

だが、面と向かって断られた日にゃ、俺あどうすりゃいいんだ……なんてぐだぐだ考えながら、さっきまでの勢いが嘘みてえにのろ歩を進めた俺は、紫乃の部屋の前で足を止めた。

……ええい、ここまで来たんだ。今更ぐずぐずしてどうする！

俺は長曾我部元親、この世で一番イケてる男だ！

「アニキー！！」と俺を励ます手下どもの幻聴を聞きながら、俺は戸の前で唾を飲み込み、すー、はー、すー、はー、と深呼吸をした。そして声をかけるべく口を開……いた時、

ガラッ！

いきなり戸が開いたので、「うおっ！？」と変な声をだしちゃった。驚いたのは向こうも同じだったらしく、

「きゃっ！」

部屋の中で紫乃が小さく悲鳴をあげて後ずさった。

「も……元親？」

目を丸くして硬直し、か細く俺の名を口にする。

「よ、よう、紫乃。何だ、どっか出かけるのか」

応えた俺の声があほみてえに裏がえった。くそ、不意打ちはやせよ、びびるじゃねえか！

「あ……う、うん」

紫乃もまだ驚いてるのか、胸元をおさえて小さく頷いた。ちら、と俺を見上げ、すぐに視線を下げる。

「えつと……元親のところへ、行こうと、思つて」

「あん？ 俺のところには？」

「あの、ちよつと、話があつて。……元親は？」

「へ。あ、ああ、俺もお前に話してえことが、あつてな」

「そ、そう。……じゃあ、どうぞ？」

何ともぎこちない会話を交わした後、俺は紫乃に続いて、部屋に入つた。

円座に腰を下ろすと、紫乃と向かい合わせに座る形になって、……落ち着かねえ。

これまで恋だの何だの話したこともねえのに、いきなり結婚について語らうなんぞ、どういや良いんだ。今更だが、唐突すぎるだろ。それにこの部屋に來ると、否が応にもあの夜のことを思い出して、肩身が狭いというか、妙な気分になるといふか……。

どう口火を切つたものかとそわそわする俺と同じように、紫乃も緊張してるみてえだ。

いつもなら真つ直ぐこつちを見て、気持ちが良いくらいはきはき物を言うのに、今は俯いてもじもじしている。普段あんまり見ねえ仕草に、ちつと可愛いなと場違いな事を考えた時、

「あの……」

紫乃の方が、先に口を開いた。

「元親……あの、私の縁談の事、なんだけど」

「お、おう」

いきなり核心だぜ。俺は背筋を伸ばし、引きつった返事をした。（縁談が嫌なんだつてな、相手が俺だからか、他に好いた男でもいるのか、あるいは他にわけがあるのか、そもそもお前は俺の事をどう思ってるんだ）

勢い込んで息を吸い込んだが、聞きたい事がありすぎて、かえって声が出ない。唾を飲み込んでようやく、

「お前、結婚したくねえのか。元は自分から言い出した事なんだろう」
一つ目の質問を口にする、紫乃はかぶりを振つた。着物の上で

さらさら、と髪が揺れる。

「結婚、したくないわけじゃないの。ただ兄上が、あんまり急に言い出すものだから、びっくりして」

「お、おう？」

じゃあ何か、結婚する事自体は良しとしてるのか、嫌ってわけじゃねえのか。紫乃はこっちを見上げ、膝の上で小さな拳をぎゅっと握りしめた。あの、と桃色の唇を開く。

「元親は、どう思う？ 私が、嫁いたら……嫌？」

「っ！？」

頬を染めた顔で上目遣いに見上げられて、一瞬息が止まりそうなくらい、心臓が跳ね上がった。俺の理性に挑戦してんのかこいつは、そんな顔でそんな事聞くなよ！

「そ、そ、そりゃあお前、い、良いに決まってるじゃねえか」

俺は勝手に熱くなる顔を慌てて右手で隠した。声がみつともねえくらいうわずっていたので、咳払いする。

「お前が嫌じゃなけりゃ俺は、いや俺だけじゃねえ、義峰も浮笹も皆喜ぶだろうさ。可愛い一人娘の輿入れなんだしよ」

浮かれ上がりそんな気持ちを抑えるために他の連中の事も口にすると、紫乃は瞬きした後、

「……そう……」

小さく呟いた。そうして深く俯いたので髪が肩から滑り落ち、顔を影に隠す。だがすぐ顎を上げて、紫乃は口の端をきゅっと持ち上げて笑んだ。

「分かった。元親がそういうなら私、結婚するわ」

「……ほ、ほんとか？」

「ええ。元々そのつもりだったし」

頷く紫乃の顔を穴が開くほどじいつと見つめる。今にも「なんてね、嘘よ」と言い出すんじゃないかと思ったが、紫乃は俺の視線に「……何？」たじろぎつつ、訂正するつもりはねえようだ。

……嘘じゃねえのか。本当に、本気で、紫乃は俺と結婚する気な

のか？ …… 何だ、あつさり話が決まったじゃねえか！

「そうか！ なら決まりだな、紫乃！」

「きゃ！？」

冗談じゃなさそうだ、とやっと確信した俺は嬉しさのあまり、思わず紫乃を抱きしめた。だが腕の中でびくん、と大きく紫乃が震えたのを感じて、慌てて身体を離す。いけねえ、前と同じ過ちを繰り返すところだったぜ。

「悪い悪い、嫁入り前の娘に悪さするつもりはねえよ」

笑いながら紫乃を見たら、耳まで真っ赤になって硬直してやがる。おいおい、何て初い反^{つぷ}応だ。その顔を見て急に腹が疼き、今すぐ前言撤回したくなったが、そこはぐっとこらえて、俺は紫乃から手を離れた。

途端、紫乃は自分の身体を庇うように両手を回して、睨み付けてくる。何か言おうとしたのか口を開き、だが思い直したように視線を避けて、

「…… そうよ。子供じゃないんだから、もっと立場を弁えて頂戴」

厳しい声音で言って顔をしかめる。まずい、調子の乗りすぎたか。ここで拗ねられちゃ、また話がこじれちまう。

「ま、ま、そう怒るなって紫乃、つい嬉しくってよ」

「……」

「もうしねえよ、指一本触れねえ！」

結婚するまではな。

必死で言い繕いつつ、心中で呟いた俺の台詞が聞こえるわけもねえが、紫乃は呆れたようにため息をつく。だが、しょうがないわね、と言いながら苦笑する様はまんざらでもなさそうだ。

（…… ああくそ、今すぐ海まで走って行って叫びてえぜ、こいつは俺の嫁だつてよ！）

ここしばらく、俺らしくもなく悶々としていた分、想いが叶った喜びは、言葉に出来ねえくらいでかい。俺は顔中でにやけちまいそうなのを必死で我慢して、

「じゃあ義峰と打ち合わせなきゃならねえな。善は急げだ、とつとと話進めちまおうぜ」

せいぜい格好良く見えるように、笑ってみせる。紫乃は少し首を傾けると、

「……ええ、そうね。早く、そうしなきゃ」

穏やかに、落ち着いた、静かな声でそう答えたのだった。

長曾我部と矢曾木の婚姻話は、瞬く間に国中を駆けめぐり、人々は喜び浮き足だった。

何しろ国主・元親が初めて迎える妻である。また矢曾木家は下級とはいえ武門、しかしながら大らかで目下には寛大に接し、目上には愚直なほど実直に仕える家風で、多くのものに慕われていたので、長曾我部家への嫁入りは大体好意を持って受け入れられた。

そういった後押しを受け、さっそく婚禮の準備が始められたが、嫁入る張本人の娘、紫乃の強い要望で、賑々しい華燭の典は行わず、出来るだけ最小限の事務作業のみで婚姻と成したいと出た。

そういった本人の希望に加え、矢曾木の家格が低い事から側室として長曾我部家に迎える事になり、それならば大仰な儀式も必要あるまい、という話に落ち着き、国中の期待感をよそに、手続きは淡々と進んでいった。

退屈な日常を抜け出し、煌びやかな儀式や、女も羽目を外して楽しめる宴が省かれる事には不満の声が少なからず上がったが、しかし当の本人たる紫乃はまるで他人事のように我関せず、部屋に閉じこもり、終日ぼんやりしていた。

周りのものが何を語りかけても耳に入らぬ様子で、輿入れの日が近づくにつれ、顔色悪しく、ため息ばかりつくようになったので、「もしや病を得たか」

と心配した兄の義峰は医師を差し向けた。しかし医師は「ご結婚を控えてあれこれと思い煩い、気持ちが悪く沈んでおられるのでしよう。何、ご婦人には良くある事です」と太鼓判を押したので、義峰はそのようなものか、と納得し、紫乃を出来るだけそつとしておく事にした。

一方元親も、元氣のない紫乃の様子を終始気にかけていたが、折悪しく瀬戸内に凶悪な海賊集団が現れ、近隣の村々を荒らすのを駆

逐して回る羽目になり、顔を合わせないまま、日を過ごさなければならなかった。

そうして若干の不安を孕んだまま、矢曾木の前当主の喪が明けて吉日。

その日いよいよ、紫乃輿入れの日を迎えたのだった。

- - -
- - -
- - -

ごとごと左右に揺れながら、かごが進んでいく。紐をしつかり掴んで身体を支えながら、私はひっそりとため息を漏らした。

かごは元々好きじゃない。自分の足で歩くか、あるいは馬に乗っていた方がまだ乗り心地が良くて良いと思う。もつとも、花嫁衣装に身を包んだこの姿では、馬に乗る事なんて到底できやしないけれど、これでもかという程、きつくまとめあげた頭にささる簪かんざしのおかげで、壁にもたれる事も出来ない。そして頭はもちろん、私がまとっているものも、婚礼用の仰々しくも重苦しい礼装の着物で、とにかく苦しくて重たい。

おまけに目に痛いほど鮮やかな金襴緞子、これ一枚で矢曾木の家一年分の食が賄えるという恐ろしく高価なものだから、少し動くだけでも異常なほど気を遣ってしまう。

こんな高価なものをどこから手に入れたのやら、兄上には聞いていないけれど、もしかしたらこれから嫁入る家からの贈り物なのかもしれない。

(…… ああ、もう)

着物に緊張するわ、髪を締め付けられるわでずきずき痛むこめかみを揉んで、もう一度ため息をつく。空気を入れようと少し開けた窓の向こうは、目の覚めるような青空で、遠くに海鳴りの音が聞こえた。

こつも晴れがましい輿入れの日だと言うのに、私はどうしてこんなに落ち込んでいるのだろう。

結婚する時、環境の変化や相手の殿方との今後を心配し、女は氣鬱になるもの、とあのお医者様は言っていたけれど、これは単に感傷によるものではないような氣がする。

結婚が決まってから周囲であわただしく準備をしていたけれど、私は全てが煩わしくなって、部屋に閉じこもってしまった。だから相手の事は、顔、性格、身分どころか、名前さえ知らない。

見知らぬ相手の妻になる、だからこれほど氣落ちするのかしら。でも、それは世の女たちの常。

殿方は家を背負い、戦場でいくらかでも名をあげる事が出来るけれど、女は家にこもって男たちをいたわり、主の言うがままに嫁いで子を成し、母となって死んでいく、それが女の一生というものだ。

矢曾木は身分が低く大らかな家だから、そこまで窮屈な思いをした事は無かった。けれど、武家の娘として生まれたのだから、私もそれくらい覚悟していたし、だからこそ、自ら兄上に結婚のお膳立てを頼んだ。

己が身を家のため、国のために役立てたいと思う気持ちは、今も変わらない。

（そうよ、いつまで落ち込んでいるつもりなの、紫乃）

すでに婚姻の手続きも終え、お相手の館へ向かっている今この時にまで、くよくよ考えても仕方ない。

お相手が誰にせよ、真心を込めて精一杯おつかえして、良き子を産んで差し上げよう。それが私の役目なのだから。

腹を決めた私は扇を握りしめ、きつと前を見据える。

と、不意にかごが大きく揺れたので、前に倒れそうになってしまった。

「な、何？」

壁に手をついた私が顔をあげると、ちょうど窓の外が見えた。かこの横にしていた女中が、

「姫様、お気になさらず。野良犬が御駕籠の前に飛び出してきたのですわ。今、男どもが追い払っております」

眉根をよせて報告してくる。いぬ？ 女中がお顔を出されては、と止めるのも無視し、身を乗り出して前をすかし見ると、確かに薄汚れた犬が一匹、道の真ん中に立って盛んに吠えたてている。

「ええいひけ、この畜生が！」

男の一人が棒をふりおろすと、犬がぎゃいん、と悲鳴をあげて跳び下がる。そして鼻面をしきりにかきながらしっぱを丸め、甲高い声で鳴きながら、脱兎のごとく逃げ出した。

（しの、下がって）

「！」

その姿を見送った私の脳裏に、幼い声が蘇る。

「おお良かった事。さ、参りますよ、姫様。もうむやみにお顔を出されませぬよう」

女中がぱしん、と窓をしめ、かごが再び動き出す。揺れるかこの中で一人きりになった私は、茫然自失としてしまった。

（しの、下がって）

その声とともに思い出したのは、色白の横顔。紙のように青ざめ、首筋を緊張させながら、それでもまっすぐ前を見据える少年の姿。

（元親）

これは子供の頃の元親。まだ姫若子と呼ばれていた、弥三郎の姿だ。

（どうして急に思い出したの）

己に問いかけて、思い至る。

そうだ。まだ幼い頃、私と元親は山の中で野犬に出くわした。大きな犬が牙をむき出しうなっているのが怖くて動けなくなった私を、元親がかばって助けてくれた。

その後は二人で泣き尽くしてしまったけれど、あの時、青ざめ恐れながら、それでも野犬から私を守ろうとしてくれた元親が急に頼もしく見えて、私はとても驚いたのだ。

(弥三郎)

心の中で名を呼ぶと、弥三郎が振り返り、それが元親の姿に変わっていく。

その時ごん、とかごが揺れたので、今度は床に手をつく。かごを止めようと口を開きかけ、けれどそうする理由が無い事に気づいて、私は声を失った。

このまま行けば、私は誰とも知らない男のもとへ、嫁入る事になる。

そうすればその男の屋敷に閉じこめられ、兄上にさえ、今ほど自由になんかなくなるだろう。

ならば、元親は？　いくら幼なじみとはいえ、国主であり、血のつながりもない元親ならば尚更。もう、顔を見る事も稀になっしまふかもしれない。

「っ！」

そう思ったら急に胸がずきりと痛んで、息が詰まった。

どうしよう。どうしよう。その言葉が頭の中をぐるぐる回り出す。どうしよう。どうすればいい。私は、どうしたい？

(いや)

自身に問いかけた時、真っ先に浮かんだのは否だった。

(このまま元親に会えなくなるなんて、いや)

会って何を言えればいいのか。元親に会えなくなるのが嫌、だから結婚したくないなんて言ったら、元親はどう思うだろう。

私が結婚すると聞いて、諸手をあげて喜んでくれた元親だから、「今更何言ってるんだ」と怒るかも知れない。元親だけじゃない、兄上や母上や、この婚礼に向けて準備をしてくれた皆、きっと落胆してしまう。私のわがままに付き合いきれないと、愛想を尽かされるかもしれない。

でも、いや。

視界が歪み、手の上にしずくが落ちる。化粧が崩れてしまうと顔を上げて涙が落ちないように堪えながら、私は唇をきつく噛みしめ

た。

いやなの。このまま嫁くのは、いや。

（元親。元親、元親、元親……）

まるで呪文のように名を呼んで、私は目を閉じて祈った。

（お願い、どうか来て。来て、元親！）

本当にそうなったらどうなるかも考えず、一心に祈った。ただひたすら、本当に真剣に祈った。

けれど、その祈りは届かない。

やがてかこの揺れが止まり、扉が横にひかれ、

「紫乃。参るぞ」

かみしも

袴を身につけた兄上が私に手を差し出す。目を開けた私は一瞬逃げだそうとして、だけど背中が壁にぶつけてしまった。

「紫乃？ 何だ、泣いていたのか」

兄上が中をのぞき込み、怪訝な声を上げる。心配そうな顔を見たら声が出なくなった。今逃げ出したら、兄上はきっと罰を受ける。

兄上が全部手配してくれたのだから、ここで花嫁が居なくなったら、責を問われるのは兄上だ。

「い、いいえ。何でもないわ、大丈夫」

私は緊張に引きつった返事をし、兄上の手を借りてかごを降りた。さんと降り注ぐ陽光の下に見たのは、海辺にほど近い場所に立つ小さな屋敷だった。

「お前の為に特別にあつらえて頂いた館だ。今日からここが、紫乃の住まいになる」

兄上が誇らしげに館を見上げ、私はますます萎縮した。

さほど大きくはないとはいえ、屋敷を与えられては、いよいよ逃げようもない。兄上に先導され、綺麗に整えられた庭先を歩きながら、私は気の遠くなる思いだった。心の中ではまだ元親の名を呼んでいたけれど、もちろん現れるはずもない。

（どうしよう。どうしよう）

恐れおののきながら私は支度の間へ入り、女中のなすま化粧や服の乱れを直され、そのまま追いつて立てられるように（と思ったのは私の気が急いでいたせいだろうけど）広間へと向かわされた。

頭痛と吐き気でくらくらしながら中に入って下座に控えると、ついで兄上がやってきて、私の横に座る。ちら、とこちらを見た兄上は、

「紫乃、本当に大丈夫か？ 顔色が真っ青になっているぞ」

驚いたように声をかけてきたけれど、私はそれに答える余裕もなく、浅い呼吸を繰り返すのが精一杯。心配顔の兄上が女中に茶を頼もうか、と言ってくれた時、その女中が、

「殿がおいでになりました、お控え下さい」

凜とした声でそういうものだから、私と兄上は慌てて平伏した。途端、きつく締めた帯が食い込み、お腹を圧迫してますます気持ちが悪くなる。

（どうしよう、どうしよう）

頭が痛い、気持ち悪い、苦しい、逃げ出したい。

そんな思いがぐるぐる回って、今にも吐き出しそうになる。私が唾を飲み込んで目を閉じた時、からりと障子が開き、力強い足音が畳を揺らし、上座へ腰を下ろす。

とうとう、来てしまった。私の夫となる人が、すぐそこに。堪えようと思うのに、目の端に涙がにじむのを、もう止められない。

（いや、いや、いや、結婚なんていや）

閉じた闇の中で浮かぶのは、嬉しそうに笑う元親の笑顔だけ。

（元親、元親、……助けて！）

もう我慢出来なくて、いつそ叫んでしまおうかと思ったその時、

「顔を上げな、義峰、紫乃」

聞き慣れた声が、耳朵を打った。

（……………え？）

願いすぎて、幻聴が聞こえるようになったのかしら。そう思ったけれど、

「そう畏まるなよ、今更知らない仲でもねえんだしな」

続く声もまた、良く馴染んだものだだった。兄上がずっと身を持ち上げ、笑いを含んだ返事をする。

「何事も初めが肝要ですからな。はじめはつけなければなりませんまい」

「もうここに来るまでに十分、花嫁御寮を見せつけたんだろうが。そろそろ楽になって良い頃だぜ、なあ、紫乃」

「……………」

まさか。まさか、これって。

「紫乃、どうした。顔を見せて差し上げろ」

平伏したまま動かない私をいぶかって、兄上がつついてくる。私は吐き気も頭痛も何もかも忘れ、信じられない思いで目を見開き、そのままゆっくり、ゆっくり身体を持ち上げた。

まさか、と思う気持ちがあまりにも強くて、顔を上げた後も視線は上座の手前で止まって、動かすことが出来ない。

「紫乃」

私の名前を呼ぶ、少し掠れた、この声、は。

「も……………もと、ちか？」

恐る恐る上げた視界に映ったのは、元親、その人。

私と目が合うと、少し照れくさそうに笑って、

「おうよ。何だ、そんなに見とれるほど男前か、俺は」

それから鼻の頭を搔いて呟く。

「ここんところ、ずいぶんご無沙汰してたんで心配だったが、……………綺麗だぜ、紫乃」

「おやおや、私はもうお邪魔ですかな」

兄上がにやにや笑って腰を上げる素振りを見せたので、元親が赤くなって「ば、馬鹿野郎、変な気を回すな！ お前と供のものには酒を用意してあるんだ、ゆっくりしていけ」と手振りで止める。

「いえいえ、私も馬に蹴られて死にたくはありません。元親様が仰られたように、今日より先は何かと慌ただしく、紫乃と元親様、ゆつくり語らう時間もとれず仕舞いでしたからな。これから夜の明けまで、ゆるりとなさりませ」

「そ、それはお前、あのな」

泡食って元親がぱくぱく、金魚のように口を開け閉めするのを見つめて、私はようやく頭が動き始めた。

（え、え、え、つまりどういう事、今私が居るのは輿入れ先の屋敷で、私は夫となる人と対面するはずで、それは今ここに来るはずで……そこに元親がいるって事は、つまり、つまり……）

つまり、元親が私の……おっと、という、こと？

「え、ええええええええええ！！！！？」

次の瞬間、私はあらんかぎりの声で、驚愕の叫びを上げ、

「うわ、紫乃!？」

「どうした、しっかりしろ！」

びつくりして慌てる元親と兄上の呼びかけを聞きながら、すーっと意識を手放してしまったのだった。

夜暮れて、深更。部屋の隅に置かれた香の匂いがやんわり漂う中、元親はあぐらをかき、眉間にしわを寄せて難しい顔をしていた。頭痛を堪えるように額へ手を当て、

「……………はあ……………」

深いため息をつく。それを見て、布団の上に正座をしていた私はますます肩身が狭くなる思いだった。

「……………そ、そんなに怒らないでよ、元親」

一度倒れはしたものの、横になって休んだおかげで気分は良くなった。だけどきまりが悪すぎて、私は不機嫌そうな元親に声をかける。けれど返ってきたのは、

「怒っちやいねえ。呆れてんだ。ったく、今日の今日まで何で気がつかねえんだよ。相手が俺だって事によ」

心底呆れ果てた、と言いたげな言葉。うっ、そんな風に言われたって。

「だって私、お相手の話、聞いてなかったし」

「義峰や浮笹と、縁談の話をしたんだろうが」

「それはそうだけど、その時も名前なんて出なかったもの。元親だって、それらしい事全然言わなかったじゃない」

「何言ってるんだ、俺は……………」

むっとして言い返そうとして、元親はふと動きを止めた。間をおいてから、ばつの悪そうな顔になる。

「そっついや確かに、お前自身にはつきり言った覚えはねえな」

「そうでしょう」

「俺は、お前がもう話を全部承知して、その上で結婚するつもりなんだと思ったからよ」

「私は、全然知らない人のところに嫁ぐものと思ってたわ」

「……………はあ……………」

疲れが押し寄せてきた、という風に、元親はぐーっと肩を落とした。ど、どうしよう、ここまでへこんでる元親なんて初めて見た。そう落ち込まないで、と私が言うのもおかしいし……。

どうしたものかとおろおろする内に、元親は気を取り直したみたいで、顔を上げた。

「で、どうするよ、紫乃」

「え？」

「お前が倒れたから、あれよあれよという間にここまで来ちゃったが、今さっき相手を知ったばかりで、結婚なんて出来るのか？」

「そ、それは……」

言われてはた、と改めて実感する。広間で気を失ってしまったので、私は寢所に運び込まれて、寢間着にさせられていた。もちろん元親も同じように着替えて、向かい合ってる状態で……。

（え、うわ、ええええ！？）

その事に気がついたら、体中の血が一気に逆流した。そ、そりや、子供の頃は一つの布団で一緒に寝た事もあるけど……大人になってからは勿論ないし、ましてやこ、こ、この状況って……！

「……………」

言葉を継ぐ事が出来なくて、あわあわする私をじっと見つめた後、元親は鼻を鳴らした。あぐらの上に頬杖をついて、

「止めるか」

ぼそつと呟く。

「……………え？」

意外な言葉にびっくりして目を丸くすると、元親が渋面のまま頭をかく。

「お前は相手が俺と知らなかったんだ。他の男ならまだしも、小せえ頃からずっと一緒だった奴をいきなり夫と思え、なんて無理があるだろ。俺はそんな無理を強いるつもりはねえ。お前が嫌ならこの結婚、止めりゃいい」

「元親……」

「何、今から家に帰って、俺に乱暴されかけて逃げたとしても言やいいさ。義峰に話を通しときゃ、お前の名も傷つかねえだろ」

「元親は乱暴なんてしないじゃない！」

思いがけない提案に面食らって、声がうわずる。元親は苦笑した。「そりゃ、するつもりはねえがな。何事もなくお前を帰したら、口の悪い連中が何言うか、知れたもんじゃねえ」

「あ……」

元親に気に入らなかったと噂が立てば、私の女としての体面が汚されてしまう。そうなれば今後、どこへ嫁入るにしても、その噂が障害になってしまいかもしれない。だから元親は敢えて、自分を悪人にしようとしているんだろう。

（元親）

その優しさに気づいたら、どきり、と鼓動が高鳴った。

突然、元親が相手と分かって動転してしまっただけけど、そもそもこの結婚は元親から申し出た話。元親は私を妻に欲しいと、そう思っているという事。それなのに今、私の気持ちを考えて、止めにしようと言ってる。

それは、私を思いやっつの事なのか、それとも元々、さほどの情熱を持って私を求めたわけじゃなかったのか。

（っ！）

そう思ったら、胸に刺すような痛みが走った。それはここに来る途中、元親と会えなくなったら、と考えた時と同じくらい、痛い。

「……………元親」

「何だ」

震える声で名を呼ぶと、元親は優しく答えてくれる。私はその目を見ていられなくて、床に視線を落とした。小さな声で呟く。

「……………私、いいわ」

「あん？」

「私……………元親が相手なら、いい。結婚、する」

「……………」

しん、と沈黙が落ち、灯台のろうそくが燃える音まで、大きく響いて聞こえた。ややあつて、元親が足を組み直し、

「本当に良いのか？ 紫乃。俺と結婚しても。自棄になってんじゃねえだろうな」

改まった口調で問いかけてくる。頬が熱くて、顔が上げられないまま、私はこくりと頷いた。

「……私、ここに来るまでの間、やっぱり知らない人に嫁ぐなんて嫌、元親が助けに来てくれれば良いのに、と思ったの」

「……………」

「元親がお相手と分かって吃驚したけれど、でも、元親なら、嫌じゃないわ」

「紫乃」

元親が不意に動いて、私の手を取った。びくつとして見上げると、元親が怖いくらい真剣な表情で私を見つめていた。色白の頬が少し、赤い。

「紫乃。お前、俺をどう思ってる」

「どう、って？」

「だから、男としてこの長曾我部元親をどう思う、と聞いてんだ」「男としてって……」

言葉が見つからなくて、目が泳ぐ。私が困って黙り込んでしまうと、私の手を握る元親の手が、かすかに震えだした。元親も緊張しているんだろうか。この場で不安になってるのは私だけじゃないんだと思ったら、逆に少し気が楽になった。言葉が口からこぼれる。

「分からない、わ」

「っ、おい、紫乃！」

「だって、元親は元親よ。そんな事私、これまで考えもしなかったもの。元親はどうなのか知らないけど」

「……俺は」

元親の頬の赤が急に増す。一度咳払いをしてから、元親は真っ直ぐ私の目を見て言った。

「ガキの頃からずっと、俺にとっての女はお前だけだ」

「！」

「嫁にするなら、お前以外考えられねえ」

「ど、どうして？」

「それを言わせんのか、今更」

「だ、だって今更って、そんなの初耳だもの！」

「だから、俺が……」

手にぎゅっと力を込めて、元親は低い声で囁いた。

「俺が、お前に惚れ込んでるからだ。それ以外に理由があるかよ」

「……！！」

はつきりした言葉に鼓動が弾み、呼吸が止まりそうになる。

「も、もとち」

かろうじて名前を呼ぼうとしたらその前に、突然視界が歪んだ。

えっ、と元親が焦った声を上げる。

「ちょ、ちよと待て、何で泣くんだ紫乃！」

「え、あつ……」

驚いて空いた方の手で顔に触れたら、指先に冷たいものが伝い落ちる。やだ、どうしてこんな風に涙が出るの、泣きたいわけじゃないのに。慌てて泣きやもうとしたけど、勝手にぼろぼろこぼれて、止められない。

「うつ、ひくっ……」

「おいよせよ紫乃、泣くなつて、おい……あああ、面倒くせえ！」

「むぐっ！？」

声を張り上げた元親がいきなり私を抱きしめたので、ぎゅうと顔が元親の肩に押しつけられた。鼻がつぶれて息が出来なくなつて、

「も、もと、ちょ……」

腕を掴んで引っ張ったら、元親は「あつ、すまねえ」と慌てて力を緩めてくれた。そのまま離してくれるのかと思っただけ、元親は私を抱きしめたまま、

「……泣いてくれるなよ、紫乃。泣いてる女は苦手だ」

弱ったような様子で囁く。低く響くその声が耳近くで響いて、私は思わずどきつとした。ううん、声だけじゃない。がっしりした腕を回されて、私と元親はほとんど密着してしまつて、着物越しにすら元親の引き締まつた身体の感触を感じる。

（まるで、あの夜みたいに）

それを意識したら心臓が跳ねて、耳元で鳴っているかのように激しく動き出して、体中が火のついたように熱くなつてきた。

（や、やだっ）

こんなにくつついていたら、どきどきしてるのがばれてしまう。

狼狽えて離れようと思つたけど、でも、そこでふと気がついた。

（あ、あれ？）

どくん、どくんと大きく鼓動する胸元、その音は一つじゃなくて二つ。服ごしに伝わってくる熱い身体と激しい動悸は、元親の、それだ。

「も、とちか」

「何だよ」

元親の腕が許す限り、少し身体を離して見たら、元親の弱り切つた顔は、今や耳まで赤くなつて、汗まで浮かんでいた。困っているような、恥ずかしがっているようなその表情を見たら、鼓動が更に早くなつてきてしまう。

……も、元親もすぐく、どきどきしてるみたい。

（ど、どどどどうしよう!?!）

時は深夜、場所は寢所、新婚初夜となれば、この後どうなるかは承知している、けどけど、やっぱり元親相手なんてどうしたら良いのかわかんない!

焦つた私は突然、不自然なくらい首をねじまげて顔を背け、

「も、元親ったら、結構女に慣れてるのね」

そんな憎まれ口を叩いてしまった。ああ!?! と元親が不満の声を上げる。

「お前言つに事欠いて、新床にいどこで何て事抜かしやがる」

「だ、だってそんな台詞、これまで泣かした女がいたからこそ出てきたんでしょっ。それにそれに、あの時だって」

「あの時？」

「だからあの、あの夜！」

酔っぱらった元親が私を……した夜！

「あの夜だって元親、随分手慣れてた！」

「うつ……あ、あれはだな、そのう……」

急所を突いたのか、元親はぐつと言葉に詰まって目を白黒させた。言い訳しようと口をぱくぱくさせて、それでも言葉が出てこない様子なので、私は更に言い募る。

「だ、大体、元親はあの夜の事だって謝ってないじゃない！」

「ああ？」

「わ、私、あんな事されるの初めてだったのに、酔っぱらった勢いで無理矢理されて、とつても悲しかったの！　なのに元親ったら謝りの文一つ寄越さないで、いきなり結婚しろなんて、無体もいいところじゃないの！」

「うつ、紫乃落ち着け！」

言葉を重ねるうちにどんどん興奮してきてしまつて、思わずぽかぽか叩くと、元親はあつという間に私の両腕をさらつて捕まえてしまった。そのまま歯をむき出しにした必死の形相で、

「そりゃあお前、俺も無茶しちまったと合わせる顔が無かつたんだよ！　それにその後すぐ、義峰にお前の嫁取りを申し入れたんだ、それで俺の気持ちも分かると思うだろ！」

「分かるわけないでしょ、元親がお相手だなんて知らなかつたんだから！」

「それは俺のせいじゃねえ！　紫乃がうつかりなだけだ！」

「何で私のせいなのよ！　そもそも元親が自分で言いに来れば、私が誤解する事も無かつたんじゃない！」

「だからそれは……くそっ、もう良い！」

「きや！」

言い捨てた元親はまた私をぎゅっと抱きしめた。言い合いで弾んだ息の下、唸るように言う。

「紫乃、やり直すぞ」

「えっ……」

「俺達あどうも、最初がいけねえんだ。このまんまじゃにつちもさつちもいけねえ。それなら最初^{はな}つからやり直すしかねえだろ」

元親の手が私の肩を掴んで、力がこもる。

「その気はあるか、紫乃」

「っ……」

低い声が体中に、心地よく響く。そうしたらまた身体が熱くなつて、鼓動がどんどん早くなってきた。血が上ってくる音が聞こえたような気がして、私は元親の肩に顔を隠して呟く。

「わ、私、元親の事好きなのか、分かんない」

「そうかい。なら、この先一生賭けて、俺に惚れさせてやる。だから」

断固とした口調で言つて、元親はぐい、と私を離れた。両肩を掴んだまま、私の顔をのぞき込んでくる元親は、あの夜のように濡れたように輝く目をして、低く掠れた声で囁く。

「紫乃。ただ一人、俺だけの女になつてくれ」

（元親）

名を口にしようとして、けれど元親の目に射すくめられて、その声に身を縛られて、声が出ない。

（嘘みたい）

元親がこんな目で、こんな表情で、私を求める日が来るなんて。元親に気圧され、おまけに鼓動が高鳴りすぎてくらくら目眩がしてくる。どこか現実とも思えないまま、

「……はい」

かろつじてその一言だけ囁くと、元親は、ふっと顔を緩めた。

「紫乃」

そしてその腕に優しく引き寄せられ、広い胸に抱きしめられた私

は、やがて訪れた闇の中で――

――長曾我部元親の、妻になった。

からり、と晴れ渡った青い空が、頭上に高く広がっている。波が打ち寄せる涼しげな音が響く中、天を突き刺すように帆柱を立てた船を中心に、野郎どもが船出の準備をしていた。

食料、商売品、それに砲台など様々な品が運び込まれていく最中、船の主たる俺は日本地図を手に、船の針路を決めているところだった。

「ふふん、ふふんふふん、ふふん」

鼻歌を歌いながら、外国人から手に入れたペンを走らせて線を書き込む。それを横で見ながら、補給はここで、この辺りは賊がうるさい、と口添えしていた義峰が突然、もう耐えられないというように思い切り吹き出した。

「ああ？ 何笑ってんだ、義峰」

いきなり笑い始めたのに驚いて眉を寄せると、義峰は一旦声を引つ込め、それでも我慢出来ない、と言いたげに口元を隠して答えた。
「何、元親様があまりにご機嫌宜しいご様子なので、つい微笑ましくなってしまうしてな」

「機嫌が良い？ 俺が？」

「ええ。先ほどから口笛やら鼻歌やら賑やかですし、お顔が滅多に見ないほど朗らかな笑みをたたえておられます」

「そ、そうか」

指摘されてようやく自分の様子に気づき、顔が熱くなるのを感じた。いけねえ、浮かれすぎて表情に出ちまってるのか。

「どうやら随分、紫乃をお気に召したようですね」

にやにやと揶揄の笑みを満面に浮かべて義峰が言う。紫乃を嫁にと申し出てからというもの、こいつはことあるごとに俺をからかいやがる。照れ隠しで誤魔化そうとするからいけねえんだと、俺は赤面を隠すよりもむしろ胸を張ってみせた。

「当たり前だろ、お気に召したさ。何しろようやく、念願の妹背になれたんだからよ」

「ははあ、左様ですか。元親様がさほどに紫乃を欲しておられたとはこの義峰、少しも存じませんでしたな」

「からかうよりも感心したように、義峰が顎を撫でて唸る。だがその口の端にはまだ、にやにやが残っていていやがる。

「しかし、なればこそ宜しいのですかな、元親様」

「何がだ」

「それほど恋しい妻を得たのであれば、時も忘れて睦み合いたいのが心情でしょう。初夜の翌日に船を出す事もありますまいに」

痛いところをつかれて、俺は一瞬顔をしかめた。

確かに、紫乃を置いてこれから海に出なきゃならねえのは心残りだ。戦いの危険がなければ、それに海の神さんが怒らないでくれるんなら、連れて船出してえくらいだ。だがそいつは、俺の居ない船を出すのと同じくらい出来ねえ相談だろ。

「馬鹿言うんじゃない。俺無しでお前らを海に放り出せるか。俺あ紫乃の夫だが、野郎共だつて同じくらい大事なんだぜ。女にかまけて、あいつらを放っておくような馬鹿になるつもりはねえよ」

そう言つて、途中で止まっていた針路の線を再度書き始める。義峰は「ごもつとも、それでこそ御大将というものです」と肩を揺すつて笑つたが、不意にその猪首を巡らせて声を漏らした。

「おや、元親様。あれに見えるは紫乃にございますよ」

「何？」

ぱつと顔を上げて義峰の視線を追つた俺は、土を蹴散らして走ってくる紫乃の姿を見つけた。

「兄上ーっ、元親あーっ！」

紫乃は、俺たちの姿を見つけて声を上げた。懸命に駆け寄つてきて、息を切らして胸元を押さえる。

「ああ、良かった……まだ、出て、なかった」

「紫乃様。どうされました、さほどに慌てて」

妹とはいえ今は俺の妻となった紫乃を相手に、義峰は一步下がって臣下の礼を示しながら言う。紫乃は一瞬戸惑って小首を傾げたが、すぐ気を取り直した。肩で息をしながら、

「船出、するって、聞いたから、お見送りを、しようと、思ってたの」

駆けてきたおかげで頬を紅潮させている紫乃は、頭のとっぺんからつま先まで、いつもより更に可愛らしく見える。青い血管が薄く見えるほど白い肌、そこから漂う汗と香の甘い匂いをかぐと、昨夜の闇がまざまざ思い出されて、ついつい顔が緩んじまう。俺は地図に最後の線を書ききってペンを放り投げ、紫乃に歩み寄った。

「紫乃、もう起きられるようになったのか」

「え？」

ようやく息を整えた紫乃は俺の問いかけに目をぱちくりさせた。

俺はニヤニヤ笑って言う。

「いや、朝方辛そうだったからな。少し無理をさせちまったかと気に「キヤーーーーーー!!!!!!」むぐっ!!」

話の途中で紫乃がいきなり俺の口を手で塞いだ。不意打ちに目を白黒させると、紫乃は真っ赤になって更に叫ぶ。

「な、な、な、何を言い出すのよ突然、ああああ兄上の前で!!!!!!」

「もご、もごもごっ」

そのまま力任せにぎゅうぎゅう押さえつけようとしてくるので、俺は紫乃の桜貝みたいに小さな手をはぎ取って、顔をのぞき込んだ。ニーツ、と口の両端が上がる。

「お前こそ何言ってたんだ、紫乃？俺とお前が結婚したのは義峰もここにいる連中も皆承知してるんだぜ。今更恥ずかしがる事ねえだろ」

「は、は、恥ずかしいに決まってるでしょ!!」

対して紫乃は、かえって人目をひくような大声で怒鳴った。

まあ言われてみりゃ、昨日まで生娘だった女には少々、あけっぴ

るげすぎる物言いだったかもしれない。しかしその初な反応が、また可愛いじゃねえか。

「ま、まあまあ、紫乃も元親様も、まずは落ち着かれて。人目を引きます故」

ぎゃんぎゃん騒いでいるのを見かねて、苦笑いを浮かべた義峰が俺たちの間に割って入った。だって兄上、と声を跳ね上げる紫乃を手振りで宥める。

「紫乃、元親様をお見送りに来たのだろう？ 喧嘩はよせ」

「わ、私だって喧嘩したいわけじゃ！ 元親につ、……渡すものがあつて」

「俺に渡すもん？」

紫乃は懷から取り出したものを差し出す。何かと見れば、四寸ほどの長さで、いくつも結び目を作った麻縄だ。紫乃は上目遣いに俺を見上げ、少し恥ずかしそうに言う。

「……あの、これ。元親のために作ったの。もらつて、くれる？」

「ああ……」

それは古くからあるまじないだった。海で風が無くなって立ち往生した時、その結び目を解くとたちまち風が吹いて進む事が出来るようになるという。船に乗る奴は恋人や妻、家族から渡され、航海の供に懷へ忍ばせてる。確か忠義や義峰も、浮笹や死んだ妻が作った守りを常に持ち歩いていたはずだ。

俺がこいつを、紫乃からもらう日が来るとは。

（本当に俺は紫乃と、結婚したんだなあ）

紫乃の掌中にある麻縄を見下ろし、しみじみ、実感する。同時に胸がじんわり温かくなって、なぜか涙が出そうになった。慌てて目に力を入れて笑みを浮かべてみせる。

「……ありがとうよ、紫乃。大事にするぜ」

「うん」

俺の言葉にほっとして、紫乃もまた嬉しそうに笑った。

「紫乃……」

途端、ぎゅう、と胸が苦しくなる。頬を染めたその笑顔はこれまで見たどんな女よりも愛らしく輝いて見えて、たまらなく、可愛い。俺は腕を伸ばすと、麻縄ごと紫乃の手を掴んだ。

「え？」

そのまま引き寄せて、抱きしめて、耳元に口を寄せ、息を吹き込むように囁く。

「俺が帰るまで、閨を暖めて待ってるよ、紫乃。我を忘れるくらい可愛がってやるからな」

「なっ……」

ぼんっ、と音が聞こえそうなくらいの勢いで、紫乃の顔に血の気が上って真っ赤になった。ああくそ、たまらねえな。その小さな耳に軽く唇を当てて、俺は紫乃を離してくしゃくしゃ、と頭を撫でた。名残惜しいが、いつまでもこうしている訳にもいかねえ。邪魔すまいと心得て、背を向けている義峰の肩を叩き、

「そんじゃそろそろ行くぜ、義峰」

「はっ」

義峰は絶句して硬直する妹をちらりと見やった後、俺と共に解はしけをわたって船に乗り込んだ。忙しく立ち働く野郎共に声をかけて回っている、「元親様、紫乃が何か言っておりますぞ」と義峰が伝えにくる。

「あぁん？」

目を向ければ確かに、紫乃がこの船に向かって叫んでいるのが見える。俺の名でも呼んでるのか、にやけながら耳をすましてみると、息を大きく吸い込んだ紫乃が、

「……か、元親、このっ、おおつけものおーー！」

港中に響き渡るような大声で、そう叫んだ。

「……し、紫乃……。さすがに、それは無礼な」

義峰が、そして周りの野郎共も働く手を止め、紫乃の暴言にぱかんと口を開けて呆れる。

しかし俺はぶはっ、と吹き出し、

[illegible]

「紫乃！」

「俺の留守は任せたぜ！　しっかりやれよ！」

事を！」

紫乃の声を背に、俺は野郎共に発破をかける。我に返った連中が「わかりやした、アニキ！」と応えるのを聞きながら、俺はせいぜいと空を見上げた。

その先にある冒険とお宝を手に入れるために。そして、紫乃の待つ港へ、また戻ってくるために。

おおうつけもの―追記

「いえ、敢えて伝えなかったわけでは……詳しい話を話す前に、部屋を追い出されてしまったので、つい。しかしその後、元親様や母上と物語ったと聞いておりましたので、承知の事かと考えておりました」

「私も、紫乃は義峰から聞き知っているものと思ひこんでおりまし

たわ」

「……なるほど。要するに皆が皆、紫乃がすでに知っているものと勘違いしたわけですね」

「ったく、何て様だ。嫁だけ旦那の名前を知らねえなんてな」

「元はといえば、若様と義峰が紫乃の頭越しに、話を進めようとしたのが原因でござりましょう」

「うっ……」

「それは、ですから紫乃が……」

「言い訳は無用ですよ、義峰。お前も若様も、少しは女心を理解すべく努めなさい」

「……分かってるよ」

「仰る通りで……」

「素直で宜しい。では若様」

「あ？」

「お約束通り、紫乃の夫として若様を検分させて頂きますが、心の準備は宜しいですか？」

「なっ……検分なんて遠慮するって言っただろうが!!」

「うふふ。お覚悟なさいませ、若様。私の責めはきつうございますよ」

「ひ、人の話を聞けよ!!」

10（後書き）

楽屋オチも書いてみた（笑）というわけで元親×紫乃の連載は終了です！ 二人のその後はHPで随時公開していきますので、ぜひお寄り下さいませ（^^）

「南通り」<http://members2.jcom.home.ne.jp/south45/>

ここまでお付き合い有り難うございましたー！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7093h/>

おおうつけもの（戦国BASARA）

2011年8月15日03時24分発行